

アドレリアンの使命

野田俊作

アドラー心理学は、今更言うまでもなく、1911年、アドラーがフロイトの元を離れた日に、最初の一歩を踏みだした。それ以降、1936年のアドラーの死の日まで、それは生きて発展しつづけた。アドラーはたえず自分の以前の考えを検討し、追加し、否定し、乗り越えていった。彼の生きている間はアドラー心理学は一日として立ちどまることなく、たえず変化し、たえず成長していた。

アドラーが死んだ日、ある意味で、アドラー心理学も死んだ。思想は成長をやめてしまった。それは、弟子たちにはアドラーの言ったことを否定する勇気がなかったからである。アドラーに付け加えることはあっても、一部たりともアドラーを否定することはありえなかった。思想はしかし、たえず自分自身を創造的に否定することを通じてのみ成長しうる。アドラーの残したものを墨守することは、アドラー心理学の自殺でしかない。不幸にして、実際におこってしまったことはこれである。欧米のアドレリアンたちは、いわば、よってたかってアドラー心理学を殺してしまった。アドラー心理学は50年前にアドラーと一緒に死んだ。今、われわれの持っているものは、生命を抜き取られた死骸であるにすぎない。

われわれアドレリアンの使命は、アドラーを乗り越えることである。アドラーは正しい出発点に立っていたと私は思う。彼は出発し、正しい道を歩んで、道半ばで命尽きて倒れた。彼の思想の方向は正しいとしても、それは未完成である。また、地域と時代の精神に限定を受けたものである。今、われわれにはアドラーの知らないこの50年の人間科学の成果が与えられている。また、われわれはアドラーが生きていたのとは違う時代と違う伝統に生きている。アドラーは間違っていたはいなかったと考える点で私はアドレリアンである。しかし、アドラーはなお不完全であり、またわれわれの文化とわれわれの時代の中、では否定するほかはない部分を含んでいると考える点で、私は保守的な意味でのアドレリアンではない。そして私は、これは私の個人的な願いにすぎないのだけれど、日本のアドレリアンが皆そのようなアドレリアンであってほしいと思う。

アドラーには学ぶべきだ。アドラーはすばらしく正しい出発をした。アドラーを窮め尽くすべきだ。そしてその後、ひとりひとりに固有のやりかたでアドラーを乗り越えてしまうこと。ひとりひとりが異端者になること。自分のアドラー心理学に到達すること。それがアドラー心理学に生命を与える唯一の道だと私は思う。そのようにするとき、やがて『アドラー心理学』は解体するかもしれない。ひとりひとりがアドラーを乗り越えて到達するものは最早『アドラー』心理学とは呼べないからだ。それでよい。それだけがよい。

更新履歴

2012年6月1日 アドレリアン掲載号より転載